

の会  
た  
よ  
り

## この秋は「忍ばずの女」

西松 布咏

「古い話である。」で始まる森鷗外の「雁」。明治十三年頃の東大生・岡田と無縁坂に住む薄幸の女・お玉の儂い恋物語。女学校時代の愛読書であった。

私の秋はこのページから始まつた。

震災からまだ二ヶ月余の五月半ばに旧友達と池之端の鷗外荘で昼食を囲んだが、たわいない昔話に花が咲いた後、私は一人忍ばずの池畔を散策した。

夏のような光が降る蓮のすがれた池面を眺めながら一十三年前のリサイタルⅢ「哀すれば唄」で演奏した「忍ばずの女」を思い出す。新しい邦楽を発表したいと、舞踊と語りを交え芝居立ての創作曲にして青山円形劇場で演奏したことを。

十月一日軽井沢・鶴間邸の「第四回薈の会」を依頼された時これを再演したいと共演者の寺田農氏に相談したところ快諾してくれた。

もうひとつ古い話である。  
紫陽花が庭いっぱいに揺れていた昨年の初夏、江戸時代の縁切寺・満徳寺で私が出演した「ンサートにヒントを得た【アジール】京都・東京公演。作・演出・映像の飯名尚人氏がダンスと音楽の新たな関係を多角的にアプローチする作品として震災前からアイデアを練つてきた。「過去は煙。燃えているのは今。私はなぜ逃げてきたのかー」

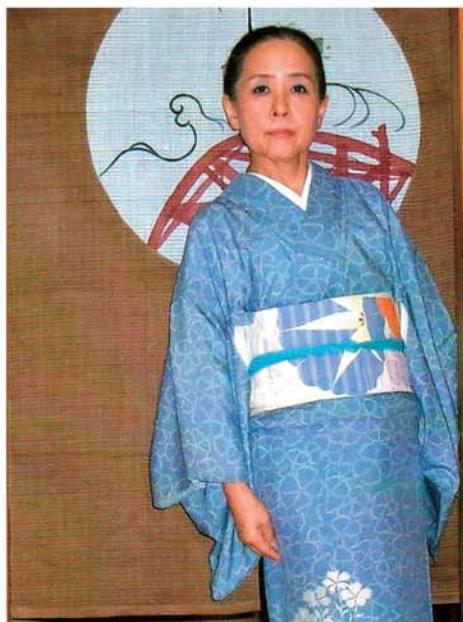
あえて音とダンスを切り離して摸索してゆくとの意図で私は東京、ダンサーの寺田みさこさんは京都でそれぞれに稽古してきたが、長い時間を掛けてようやく煙草の煙がかたちに顯ってきた。

私は以前から四百年前の吉原の遊女をイメージに唄うよう指示されていたが、段々と具体化してゆき、なんと江戸三大妓女である高尾太夫になるよう所望された。「忘れねば思い出さずに候かしく」の名文句を残し数々の高邁な男達を翻弄してきた才色具えた松の位の太夫。男が辛い現実を忘れる為に通う遊郭が【アジール】なら、

やはり自然のなせる技になす術を持たぬ人智の限界に憐れを感じてしまうのだ。でもこの世にいる限りはお玉のように【忍ばずに生きたかりけり】と唄い続けて行きたい。

お玉も高尾太夫も我が恋のため、【忍ばずに生きたかりけり】を貫いた。

紅葉燃える秋の深まりゆくなか、女達の声に耳を澄まして唄いたいと思う。



遊女の【アジール】は煙草の煙。嘘と誠の真ん中を長い煙管をくゆらせながら逃げ続けてきたしたかな女。しかし隅田川で舟遊びの折に、見受けを申し出た伊達綱宗公のうず高く積んだ金子を尻目に「わちきは廓の女でござんす。意地と張りが命でござんす」と、きっぱり拒否し、首をはねられ舟べりに逆さ吊りになつて隅田川の水底に沈んでいった。太夫には島田重三郎という深く契つた男がいたという。

## 日常を忘れて

杉原 知恵



明日の天気は芳しくないとの予報で重たい気分になつていた。一夜が明け、十月一日の土曜日、東海道・長野新幹線を乗り継ぎ、昼前に軽井沢に降り立つた。ホームの階段を昇り、改札からコンコースを通り、タクシー乗り場に出た。快晴だ！ 澄んだ青空とぞうしりとした浅間山が出迎え、ひんやりとした軽井沢の空気が心地よい。「第四回薊の会」が催される鶴間邸。開演までの時間、周りを散策した。木々は紅葉を始めており、蒲の補が風になびいていた。道端にひときわ鮮やかな赤紫の薿の花を見つけた。

こんな軽井沢の秋の気配に満たされた午後、「第四回薿の会」は開演した。

第一部は、森鷗外原作「雁」より「忍ばすの女」。西松布咏師匠による創作曲である。

布咏師匠のいつもと少し違う重い三味線の音色で演奏が始まった。屏風の前の師匠がお玉に変身している。

お玉は囮われ者となり、意図せぬ日々を送つてゐる。ふと格子窓から垣間見た青年へ恋心を抱く。無縁坂の忍ぶ恋が始まる。秋立ち初めし夕暮れに、ふと見交わした二人。お玉は忍ぶに耐えぬ女になつてゐた。

百三十年も前の悲恋物語が、布咏師匠の音域の広い艶やかな声で語られていく。現代版女淨瑠璃のように。素人の私にはどう表現してよいのかわからないのが残念であるが、低音は勿論、艶やかな裏声となる高音はまさに師匠のもの。いつも私の心は驚撃にされ揺れる。

第二部の前半は、俳優・寺田農氏の「森鷗外の生涯について」のお話。

鷗外のエピソードの紹介や寺田氏の「忍ばすの女」解釈論も披露され、興味深く拝聴した。

第二部後半は、事前に何の打合せもなく、寺田氏がどう朗読するか布咏師匠は知らず、布咏師匠が三味線をどう朗読に挿入してくるか寺田氏は分からぬといふ。朗讀と三味線の即興コラボレーション。朗讀は鷗外の「最後の一句」である。鷗外の「雁」や「舞姫」などは私も昔愛読したが、この「最後の一句」は初めてであつた。

大阪の居船頭桂屋太郎兵衛が荷主に無断で米を売り横領したという罪で入牢、斬首が決まる。少女いちは、妹弟と共に「父の身代わりに」と申し出る。奉行は、「そうなれば父と対面できぬがよいか」と迫る。いちは、「よろしくうございます」と冷ややかに答え、少し間をおいて「お上のことに間違いござりますまいから」と言い足した。

緩急自在、抑揚の効いた朗讀。それに三味線が挿入され背景、心理描写を形成していく。即興の緊張感の中で「最後の一句」は絶妙な間をもつて語り終えられ、私は陶酔していた。

第三部は、懇親会である。先ずは寺田氏の音頭で乾杯。お酒を酌み交わしたり、料理を頬張りながらの歓談。今回は、いつもの裏方さんと共にプロの板前さんにもお願いして季節感一杯の料理を堪能した。

いつも美しい奥様ご同伴のS氏、今日は恩師である年配の紳士とご一緒に、とても暖かい空気がお二人の周りに漂つていた。ご多忙の中参加された建築家のT氏。その弟子のAさん、次回は新妻ご同道を楽しみにしています。遠方から和服でいらしたTさん、お若いのに自分で着付けなさつたそうで、感心しました。舞踊家の先生の立居振舞には、すっかり魅了されました。毎回料理



が美味しいと仰るIさん、今回もお気に召しましたか。会場は和気藹々とした中で、熱気さえ籠もっていたが、時間は容赦なく過ぎていった。日常を忘れ、いろいろなジャンルの素敵な方々と同じ時間を共有できた喜びを噛み締めた一日だった。

それでは、次回お目にかかる日を楽しみに、ご機嫌よう。

## 秋のひととき 江戸唄あれこれ

塚本 陽子

もう二年前になるでしょうか? 神田明神の隣にある千代田区指定文化財「神田の家」で、芝居茶屋新日屋が西松布咏さんの演奏会を企画し大好評を博したのは。

今回は、江戸の香りを残す花街神楽坂の老舗料亭「うを徳」で繊細な旬の味と西松布咏さんによる三味線の優雅な音色を楽しみませんか、と「神楽坂うを徳」西松布咏秋のひととき「江戸唄あれこれ」を企画いたしました。

初代の萩原徳次郎は侠気と料理の腕前で知られ、明治の文豪・泉鏡花にも大層贊美にされて、鏡花の作品『婦系図』では江戸前の魚屋「めの惣」として登場しています。

九月二十三日・秋分の日、秋風が空を一と刷毛しきりと晴れわたった午後、本多横町中ほどの粋な黒板塀に囲まれた「うを徳」は、しつとりと秋色に包まれ、限定二十名のお客様の為に二階のお座敷を貸し切った贅沢な会が始まりました。

和服をそれぞれ粋に着こなしたお客様は和やかに歓談しながら、豊かに香る松茸のお吸い物と松茸ご飯、季節を先取りしたようにほつこりした揚げ出し里芋、新鮮なお刺身などなど、秋の香りと味覚いっぱいの会席料理の品々に舌鼓をうちました。

やがて、デザートも終わって、ゆっくりと寛いだ雰囲

に溢れてゆくお座敷の一角に金屏風と絆毛氈が敷かれ、布咏さんのご観戻から贈られた秋の花籠も華やいで、これから始まる演奏への期待で胸が高鳴ります。

そんな中、薄墨色の着物に艶やかな紅葉の柄の帯が素敵な西松布咏さんのご登場。

想う男に秋や桔梗の一枝を恋文に忍ばせる端唄『萩桔梗』が三味の音と共に唄われるとどこからともなくしつとりと秋が忍び寄ってきたようです。

継いで小唄『春浅き』「婦系図」湯島の境内での別れ話の場面が芝居のように鏡花の世界がするすると広がってゆきました。

さらに歌沢『海晏寺』あれ観やしゃんせーもみじイイがりいで金屏風が紅葉色に真っ赤に染まつたようでした。ホールで聴くのとはひと味もふた味も違う情緒あるお座敷で聴く、季節の唄。・・・

そして、花街の風情が漂うお座敷に相応しく、新内小唄の『蘭蝶』、『仇名草』で終演に。

この日のために選ばれたプログラムは、合間に解説を交えながら全部で十一曲。布咏さんの声にすっぽり



と包みこまれた部屋は江戸情緒に溢れ、瞬く間の七十分でした。

落ち着いたしつらいのなかで一葉や鏡花の世界に移ろいながら、端唄・小唄・歌沢・新内小唄の「江戸唄あれこれ」で、美しい日本の四季を感じ、日常を忘れる秋のひとときでした。

## つかず離れずのぜいたく

小岩井 忠道

うだるような暑さで連日寝不足気味の七月一六日、神田明神・明神会館内で開かれた「江戸唄と落語を楽しむ「江戸夏粹賑廻」」を堪能させていただいた。布咏さんにお近づきになれたのは、前号に「日本人による『思いやりと覚悟を』」という格調高い文を寄せていた旧友、軍司達男氏の紹介がきっかけだ。氏は「二十年來の関係と書いていたから、当方も相当、長い間、お付き合い願つてることになる。鑑賞させていただいた演奏会も数多い。古典に限らずさまざまな領域の芸術家と競演しているのに驚嘆したことしばしばだ。

平成十八年十二月の「セルリアンタワー能楽堂五周年記念公演ー語り・舞・能舞ー馬場あき子による橋姫の世界」は、布咏さんが作曲・唄、三味線を担当した舞に加え、女流義太夫界の重鎮、竹本朝重の語り、シテ、津村禮次郎による能舞という三様の「橋姫」競演が楽しめる豪勢な催しだった。観客席で目にした多田富雄氏は本業の免疫学だけでなく、新作能の作者として知られる。車椅子生活を強いられる氏にとつても見逃せない舞台だった、ということだろう。それ以前に何度か舞台や研究業績に触れることがあった朝重、多田氏ともその後、亡くなられたのは、なんとも残念だ。

明神会館での「江戸唄と落語を楽しむ「江戸夏粹賑廻」」では、布咏さんの江戸唄をたっぷり一時間楽しめさせていただいた。布咏さんの芸域の広さは、あらためていうまでもないが、筆者のような万年初心者は、小唄、端



唄とよばれる演奏が最もしつくり来る。「鐘の中にもいられないかねは　かねがね気兼ねに　あの明けの鐘」「：うちのひと　：他所のひと　どちらでもない　あなたとあたし　せめてしるしの　対浴衣」などという詞には、にんまりしてしまった。できたら自分もこんな文章を書きたいものだ、と。正朝さんの「唐茄子屋政談」もまた、忘れられた日本人たちを描いて実に面白く、満足する。一時間たっぷり割愛なしに聴くことができるというのもこうした会ならではのせいただろう。口調は乱暴だがあたたかい叔父や唐茄子を代わりに売りさばいてくれる気風のよい兄さんたちの威勢のよい言葉と、頼りないけれど人だけはよい主人公の言葉を使い分ける場面は特に見事で、最後まで退屈することがなかつた。

最近、折に触れて不思議に思うことがある。昔から庶民の世界に息づいていた寛容の精神というものを、なぜ日本は太平洋戦争後にもう一度社会に根付かせられなかつたのだろうか、と。今、男女関係を週刊誌などに書かれ、地位の高い有名人ほど深刻な社会的制裁を受ける話題に事欠かない。しかし、日本社会は男女ともに未婚



者が増え、さらに少子高齢化のマイナス面が呼ばれる昨今だ。男女関係だつてもつと多様であつてよいではないか。筆者などは、それこそ本人たちの勝手ではないかと思うが、世の中はむしろ建前がますます偉そうに幅を利かせてしているように見える。

日本社会の指導者たち、指導者たちの言動、資質を日々たたくことに飽きないマスメディアの人々にこそ、布咏さんの唄と糸、正朝さんの嘶は聴いてもらつた方がよいということだろうか。かくいう筆者も長年、通信社の記者として行政の落ち度などをほじくりだすのに精を出したから偉そうなことは言えないが…。ただ、一ついえることは、大事なことを聞き出すには、記者と取材対象者に一定の緊張感があるうちの方がよい、ということだ。付き合いが長くなると、重要なことほど折り入って質問ににくくなってしまう。

考えてみると筆者も布咏さんから、大事なことをほどんど伺っていない。つかず離れず。なんともいい加減なファンとしかいいようがないが、引き続き見捨てないでいただければこんなうれしいことはない。それこそ寛容の精神をもつて。

## 《今後の予定》

● 平成二十三年十一月十日(土) 午後五時半開演  
平成二十三年十一月十一日(日) 午後五時開演  
東京・池上實相寺

「アジール」東京公演

音楽 西松 布咏  
振付・ダンス 寺田 みさい  
作・演出・映像 飯名 尚人

● 平成二十四年一月二十八日(土) 午後三時開演  
芝浦港南区民センター

江戸唄と落語を楽しむ「参」

江戸唄 西松布咏  
落語 春風亭正朝

● 平成二十四年一月十二日(日) 午後三時より  
岐阜 かわらや 大広間  
第九回 粋艶会のつどい  
粹艶会一門唄い初めと新年会

■ たより 第70号

発行者 美紗の会

編集責任者 大久保 朋子

デザイン 近藤 幹則

美紗の会

主宰 西松 布咏

稽古場

電話

白金台ブレイス 三階  
(三四四一) 二七一六  
(五四四七) 二四一二

E-mail : nfue@soleil.ocn.ne.jp  
URL: http://www17.ocn.ne.jp/~misa5

